

制作・発行=さっぽろ自然調査館

◆〒004-0051 札幌市厚別区厚別中央1条7丁目1-45 山岸ビル3階
 ◆電話= 011-(892)-5306 ファクス= 011-(892)-5318
 ◆電子メール= chosakan@cho.co.jp
 ◆郵便局払込口座= 02740-2-58150 [(株)さっぽろ自然調査館]



新年年賀状号



エゾヤマザクラ ソメイヨシノ

●地球温暖化は植物の開花時期にどう影響するの? → 1頁



クッタラ湖 エゾオマルハナバチ オニヤブソテツ



天塩有明の海岸 エゾカンゾウ

●フラワーソン参加報告 → 6頁
 ●確認植物上位200種 → 18頁



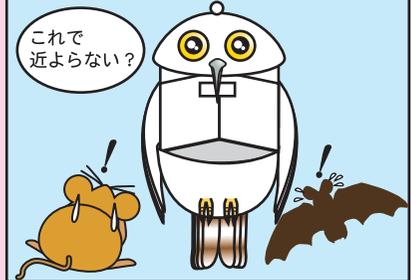
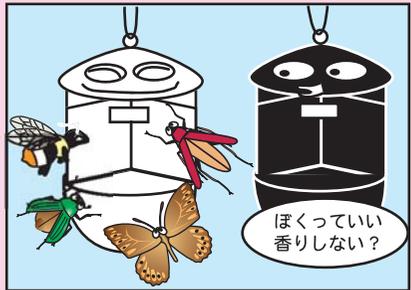
●実施ドキュメント → 9頁



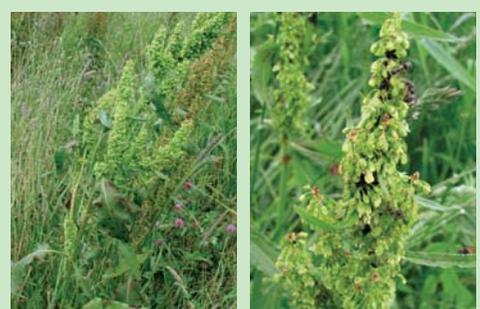
アオダモ



エゾノカワヂシャ



●生き物採集記
 ~誘引衝突式トラップ編~ → 20頁



ナガバシキンシ

●タデ科のスケッチ紹介 → 25頁

●今までの活動・ニュース・講演会膨張記 → 28頁・裏表紙

今月までの活動・ニュース 1-12月

2008年の活動を紹介します。今年もあっという間に過ぎてしまいました。こんなことやってたんだな〜と読んでみてください。同じような行事も毎年ありますが。

1月

●佐藤謙氏出版記念と沼田賞受賞を祝う会〔15日〕

いつもキリギシ山などで希少植物調査をご一緒する北海学園大の佐藤謙さんが昨年、『北海道高山植生史』（北大出版会）を出版されたのに加え、日本自然保護協会の沼田賞を受賞されたのを記念して、札幌でお祝いパーティが開かれた。幹事の石川幸男さんを始めとした自然保護協会、大学関係者や出版会の方々などが参加。うちからも3名が出席した。『高山植生史』は謙さんの長年の調査研究が集大成されたものであるが、考えてみると、そのごく一部とはいえわれわれも協力できたことには感慨も湧く。おめでとうございました。（に）

●北海道盗掘防止ネットワーク活動報告会〔26日〕

盗掘防止ネットのメーリングリスト運営を引き受けたこともあり、久しぶりに会合に行く（会社設立後は初めてかな）。参加者は35名程度。アポイファンクラブの皆さんや利尻の小杉さん、青い山脈の清水さんら遠方からの方々も。最初に佐藤謙さんの講演1時間。条例指定種の紹介を中心ということで、我々と実施している個体群調査の話も結構メインで。その後は各地からの報告。清水さんは2000～01年に設定した草原のプロット（タカネオミナエシ・ミヤマアズマギク）は継続して調査して下さっているということで大変ありがたし。

ちょうど調査館を結成してから会社設立するくらいまでの時期は、盗掘防止の機運が非常に高まっており、行政も協力

的で、道の希少生物条例に結びついた経緯がある。しかしその後、活動も行政の動きもやや低調と言えなくもない。それは盗掘があまり目立たなくなったこともあり、よい面もあるのだが、最近また盗掘の報告が出てきたことや、オーバーユース関係の問題のことを考えると、活動が不活発になって対応できなくなってしまうのは痛い。北海道も予算に苦しいということもあり、希少種対策に力を入れているとはいいがたく、とりかえしのつかない事態を招くのは心配。地道な活動をうまく続けていかなければいけないだろう。（お）

2月

●達古武・調査体験会〔9日〕

2007年度に引き続き、釧路の冬の行事に挑戦。テーマ的にはほぼ同じで、参加者も共通の人が多かったので、フィールドを変えることで結果を比較することに主眼を置いた。メニューとしては、エゾシカの痕跡の観察、河畔林でのヤチタモがエゾシカに食べられた割合の調査、沢での水生生物の捕獲調査。去年もそうだったが、冬にも豊富な水が流れる湧水性の沢を歩いているだけで楽しい。天気も非常に良く、楽しめた。去年大うけだったザリガニは捕獲できなかったが、冬ごもり中の大きなおなかの力エルがたかさん。「水から出しすぎていると凍って



死んじゃうから、早く水に戻して」という感覚がふだんと逆で面白い。

今回歩いた沢は去年の沢より土砂流入などで状態が悪く、違いは分かりやすく、学習会には便利だった。（お）

●和琴展示作成〔27日〕

2007年からつくり続けていた和琴半島自然教室の展示製作がいよいよ最終局面に。製作をしている釧路の得地ファニチャさん、日の出工芸さんと現地で作業。ウチは配置の最終確認と、ジオラマなどに使う鳥の剥製の調整・取り付けを担当。コンパクトながら、本物素材をふんだんに使ったユニークなものに仕上がったと思う。近くに行かれたときにはぜひ見てください。2006年のシラルト口自然情報館同様、無人で一部屋の小さい展示です



が、「面白いの見たー」という気になる展示だと思いますので。

製作の前後には、冬の当地の取材と写真撮影も。屈斜路湖にはたくさんのオオハクチョウが来ていて、のんびり写真撮って楽しみました。（お）



3月

●知床世界遺産研究者報告会〔10日〕

北海道森林管理局の森林調査を担当した関係で、知床世界遺産の研究者報告会に出る。知床では環境省の調査事業を中心にたくさんの調査が実施されていて、多くの研究者が関わっている。そのため報告会も、丸一日発表通しという長い会議。翌日の科学者委員会を控えてのまと

めという形。知床関係は、昔学生のときに何日も行って世話になっていたのでも久しぶりの人も。

エゾシカの個体数管理や河川工作物の改修などの具体的な話のほか、調査間の連携やモニタリングのあり方、研究発表や地元向けの還元などの話が出ていた。モニタリングはいずれ市民ボランティアに期待という行政の話に、山中さんが「ボランティアは水準の維持を考えると高コストですから」と釘を刺して苦笑。どこでも「市民ボランティアに期待」が行政の不作為の言い訳になりがち。（お）

●封入標本展示会〔8～16日、22～30日〕

東大雪友の会で長くお付き合いをさせていただいている平田さんが帯広で開いている陶芸ギャラリー「ひのくにや」で展示会を開かせてもらった。封入標本については、作品もいろいろたまっているのでいつか展示会はやりたかったが、ひよんなことで実現。「さっぽろ自然調査館設立10周年記念」とまで冠していただいた（そんなことは気に留めていなかった…）。日の出工芸さんに協力してもらって作った回転式展示やスライド式展示、証明つきなどもあって、それらしくなったかとは思ふ。

以下は「自分たちの思いをアピールして」と平田さんに言われて書いた紹介文。

「自然誌封入立体標本展 さっぽろ自然調査館では、北海道の自然の姿を多くの人に伝えるために、動植物の調査・研究や、自然紹介の展示・教材づくりにこだわってきました。

今回は、今までに各地の博物館等の展示や学習キットとして製作してきた作品を一堂に集め



て紹介します。さまざまなコンセプトでつくられた作品群を、ぜひ手にとってご覧下さい。身近な自然の美しさや面白さを再発見して下さい！」 (お)

4月

●支笏洞爺周りに〔10日〕

7月にサミットが開催される舞台でもある洞爺湖と支笏湖の子ども向け自然学習ハンドブックを作ることになり、打合せと撮影兼ねて3人で行くことに。まだ緑に早い時期だったが、西山火口周辺など案内してもらった。このあと、企画・改訂を重ねてサミットも過ぎ、難産で時間がかかりご迷惑かけつつも、ついに完成。支笏湖・洞爺湖、それぞれ20ページで、小学生でも書き込みしながら楽しめるようになってマス機会があれば見てみて下さい。(お)



5月

●カレンダー写真収集・厚沢部〔4～5日〕

カレンダーに使う植物写真を撮るため、ゴールデンウィークを利用して厚沢部に出かける。渡島半島をここまで南下すると、森にはブナをはじめとする温帯性の植物が豊富に生育する。折しも木々の芽吹きで、そこそこでブナ林の春景色を眺望できた。厚沢部には土橋自然観察教育林(レクノ森)があり、ここには以前調査館に勤務していたこともある野

村昭英君が町の臨時職員として常勤している。今回、彼にはガイドをしてもらったうえに宿まで提供していただいた。教育林の自然が素晴らしいこともあるが、彼のブログは秀逸なのでぜひ多くの人に見てほしい(<http://tskk.exblog.jp/>)。夜は、以前の調査の際にもお世話になった鈴木憲昭さん宅におじゃまし、会食の仲間に入れていただいた。あいにくの強風だったが、念願のナガハシスミシの写真も撮れて、早速新年のカレンダーに採用する。(に)

●野幌でプロガイド養成講座〔13日〕

NPO法人アースウィンド(代表、横須賀邦子さん)が主催する「プロガイド養成講座」に講師の一人として参加する。横須賀さんによれば、野幌森林公園で活動する「プロ」のガイドを養成することを目的としていて、江別市と共同でこれから3年くらいかけて同様の講座を随時開催するとのこと。

自分も有料で自然ガイドをやることがあるので、プロといえはいえなくもないが、たかだか年数回でありガイド専業からは程遠い。果たして適任といえるかどうかは分からないが、かつて10年ほど前にやった孤立林調査の結果などを引っ張り出してきて(この辺のことは調査館通信14～16号で詳しく紹介している)、野幌やその周辺の自然について詳しく解説した。また、これだけではガイド志望の参加者から不満足の声があがるといけないので、うちのスタイルでもある「調査体験型」観察会の事例についていろいろ紹介した。午前の講義はふれあい交流館で行ない、午後からは野外に出て林床植



生の調査体験などを行なった。

タイトル(「フロ～」)が物々しいだけに、いったいどんな参加者がいるんだろうと思いながら当日を迎えたが、中高年の女性が中心で、まずは地元の自然についてしっかり学習したいという人が多いようだった。座学プラス実習というスタイルなど、ひがし大雪博物館で毎年やっている「ガイド養成講座」と雰囲気的にはよく似ている。

なお、講演に使う写真集めなどをするために、久々に札幌市内の孤立林散策を試してみた。10年前に調査をやっていたころは、あちこちの孤立林(緑地公園)で散策路やら遊具やらの園内整備中だったが、その後はあまりやられていないらしく、大きな変化はなかった。むしろ柵や木道などが破損したりして、管理が行き届いていない緑地も見られた。整備といえば、パークゴルフ・ブームは今も健在で、もみじ台緑地は広大なパークゴルフ場になってしまっていた。けっこう、アカネズミがたくさんいた緑地だったんだけどなあ。(に)

●アースデー・エゾ 2008「てくてく散歩 in 夕張」 [24日]

フォレスターズクラブ(代表、宇野保子さん)が主催する「てくてく散歩の集い in 夕張」に参加する。自分は不勉強でアースデーのことをあまり知らなかったが、「地球のことを考えて行動する日」として1970年にアメリカで始まって以来、世界中に広まったものらしい(パンフによる)。2008年は北海道だけでも30くらいの催しが約2ヶ月かけて行なわれ、そのうちの一つを夕張でも開催しようとい



うもの。サブタイトルが『『おしりが白いハチ』をさがせ!』で、セイヨウオオマルハナバチ問題の普及・啓発がテーマだったため、協力することになったものである。

市内に住む4歳前後のちびっ子たちとそのお母さん方、保母さんらが主な参加者で、スタッフを合わせると30名弱となった。午前中、鹿ノ谷地区で自然観察をしながら虫探しをした。天気にも恵まれてたくさんのマルハナバチが飛ぶ姿を見ることができた。また、セイヨウの女王も2頭捕獲された。東大保全生態学研究室が出しているレポートをみると、夕張市内ではこれまで記録がなく、今回が初めての捕獲になる。ただし、今のところはアカマルやエゾオオマルなどが在来種の生息密度が高く、セイヨウの定着は限られている印象である。

午後は子ども達がいつも通っているという保育園を借り、室内で散歩コースの生き物マップづくりをやったり、フォレスターズのスタッフによる寸劇や「パネルシアター」が行なわれた。私は、マルハナバチへの理解を深めてもらうためのミニ講演を行なった。小さな子どもでもなんとか興味を持てるように工夫してみたつもりだが、はたしてどうだったのだろう。今回はセイヨウの話は控えめに、在来のマルハナバチのことを中心にしてみた。

なお自称マルハナバチ・フリークながら、マルハナバチの講演をするのはこれが初めてだった。(に)

●日本造園学会 [24日～]

造園学会全国大会が札幌で開かれ、ポスター発表に修と展之が参加。釧路達古武地域の自然再生ネタで、修はカラマツ林の自然林再生の話題を、展之は以前に生態学会でも発表したネズミ・鳥類・地表性甲虫を指標に使った森林の評価手法の検討の話題を発表した。全国大会とはいえ、地元開催のために聞きに来る人は知り合いが多かった。

空き時間に口頭発表を聞いていると、関東の千葉でネズミ数種の生息環境を調べている発表があり、アカネズミが草原を利用しているとのことだった。自分の発表ではアカネズミは森林の発達とともに密度が増えるという内容だったので、草原を利用するというのは疑問である。これは、千葉の冬は温暖で積雪もないため、ドングリに頼らずとも虫などのエサがとれるため草原にも出てきているということらしい（ちなみにドングリもあれば貯食はするそう）。所変われば生活スタイルも変わる一例だが、千葉ではアカネズミは指標としては使えなさそう。（の）

6月

●手稲さと川探検隊調査会・春調査編〔1日〕

札幌市手稲区の森や川を中心に活動をしている市民団体の手稲さと川探検隊（代表：鈴木玲さん）。川の生き物をちゃんと調査をして現状を記録しておきたいという隊の主旨のもと、市民調査として水生昆虫調査を行なうことになった。その1回目の春調査。専門家の斎藤和範さんにも来てもらい講師をお願いする。前日は運動会だったことと天候が雨の予報だったことで親子の参加者は少なかったが、学生が多く集まり総勢20名以上で調査する。当日は天候もよくて川に入るには気持ちのよい日だった。

調査したのは上流の清流、下流の街中を流れる川、下流で水の流れもない汚い川など環境の異なる4河川。1日で4河川、しかも定量調査と定性調査を行なうという市民調査にしてはかなり欲張りなスケ



ジュールだったが、川によって生き物の違いを実感できたとし、場所を変えるので子どもも飽きないので良かった。街中の川でもかなり生き物は豊富で、ムカシトンボからモクスガニまでいろいろと観察することができた。（の）

●アポイ気象観測〔3日〕

毎年行なっているアポイ岳の気象観測。今年も、環境科学研究センターのスタッフのみなさんと一緒に登る。気象観測は今年で終わるが、条件が厳しすぎるのか全体にあまりうまくいかなかった。春一番の花はかなり終わっていたが、満開のアポイクワガタを初めて見ることもできた。（に）



●環境総合展〔18～20日〕

環境問題をメインテーマの一つとした洞爺湖サミットに関連して、環境に関する技術を紹介する環境総合展が札幌ドームで開催された。出展希望の企業が予定していたより多く、ずいぶん盛況だったよう。札幌市や環境省、開発局などの官庁も出展していた。ウチは雪印種苗さんに間借りして、封入標本を展示させていただいた。まあ人寄せというか、直接環境に関する技術ではないが、普及啓蒙も含まれているということで、手持ちの標





本を飾った。しかし、この展示会、いったい誰向けなのか。新聞でも大きく紹介されていて（道新も出展企業だ）、一般向けっぽいところもあるが、一般市民が来て楽しむ要素はあまりない気がする。一応、家族連れでも来てみたが、一部にエコロジーな乗り物の試乗とか、ものづくりの体験コーナーなどあるので、ちょっとは楽しめる。

雪印種苗の展示は、在来種の苗を海岸から高山まで紹介ということで、鈴木さんが実物を鉢植えて並べて楽しかったが、もっと大規模にやっているところもあって（イオンは木を何株も並べて森みたいにしていて）、びっくりである。たった3日間で撤収ということで、何かもったいなさ感が先に立つが・・・撤収は札幌ドームから車で出るのにえらい渋滞で手間取った。ドーム内に臨時店を構えた宅配屋さんか異常に盛況で不思議な光景。

近年の環境問題の取り上げ方については、政治的に煽っていて、温暖化など問題は大きくないのに非科学的に取り上げているという批判もよく見られるようになった。実際に危機的な状況になってきているとは思っているので、水をかけすぎるのは疑問だが、こういう展示会を見ているとあやふやな感じがするのも事実。無理やり「環境によい技術」を作り出していて、資源節約や自然破壊阻止に役立つとは思えないものも多いような。（お）

●樽前山・支笏湖〔21～22日〕

早起きして樽前山に登った。いつも自宅近くから見ている山であるが、登るのは11年ぶりである。支笏洞爺国立公園のパンフレット製作のための取材目的だっ

たので、溶岩ドーム、パン皮状溶岩弾、花の写真などを手当たり次第に撮る。事前に火山関係の参考書を見ていたので、あれがA噴気口だとか、これがアグルチネート？などと素人の地学巡検をやりながら歩く。天気がいまいちだったが、曇らなくてよかったと思う。二日目は、支笏湖周辺をまわり、外輪山の様子やエゾシカの越冬地などを撮影する。（に）



●社員研修の講師〔24日〕

三井物産フォレストという林業大手の社員研修の講師を引き受ける。ときどき環境保全をアピールした大きな新聞広告が出るので、この会社を知っている読者の方もいると思う。道内のみならず全国各地に山林を所有していて、HPを見ると「王子製紙（株）、日本製紙（株）に次ぐ国内第3位」の森林面積ということである。

社員研修の講師は初めてで多少構えてしまったが、所有する森林を職員の方と一緒に歩いて植物を見たりおしゃべりしたりという部分は普通の自然観察会のように、初めて見る土地でもあり、楽しかった。午後は、林業会社ができる環境貢献などについての討論会。お話を伺っていると、自然好きの職員が多くて、外仕事の合間などに各自で花や動物の写真を撮ったり、希少植物を探したりしているということである。木材生産を続けながら、しかもコストがかからない希少植物の保全のあり方（台帳作りと監視の方法）などについて提案してみる。初めて民有林の現場を見ることができたりして、かえって自分の方が勉強になった。（に）

●夕張岳希少植物調査〔30～1日〕

佐藤謙さん、道の自然保護課のスタッフのみなさんと調査隊を組み、夕張岳の希少植物調査に行く。道が条例で指定した希少植物19種のうち、夕張岳にはコウバリソウ・コウバリコザクラ・シソバキスミシの3種が生育する。これらの現況を把握することが目的である。夕張岳では以前から希少植物の調査を行なっているが、調査区がだいぶ増えた。詳しい結果をお話できないのは残念だが、これら3種は登山道沿いからは姿を消してしまっている。めったにないくらいの好天に恵まれ、仕事もはかどったし、見ごろの高山植物の花にもいろいろ出会えた。
(に)



7月

●釧路・森林再生小委員会〔4日〕

釧路湿原再生協議会の部会の一つで、達古武の取り組みを管轄する森林再生小委員会が開かれる。前回から1年以上が過ぎてしまっており、地表処理試験の結果や今後の計画について紹介する良い機会となった。今回は林野庁の再生地雷別地区とともども現地案内もあり、委員・事務局で雨の中、ぞろぞろ歩き回った。

試験結果は見た目にはあまり分かりやすいわけではないのだが（ここ数年は不作で実生の発生が全体に少なかったため）、分かりやすい結果が出ている調査区に案内してみよう。今年地表処理（ササ刈り）を予定している場所も合わせて。（お）

●滝川市観察会〔16日〕

昨年度に、滝川美術自然史館からの依



頼で製作した封入標本「滝川の生き物立体図鑑シリーズ」。子どもたちに植物の面白さを伝えたいという、滝川市在住の植物愛好家・故村田武雄さんの意志により製作された。小学校で活用してもらうことを意識して、滝川で見られる草花を森・草地・水辺の環境ごとに紹介した標本や、コナラなど滝川を代表する植物について、フェノロジーや関わりのある生き物を紹介する標本を製作し、学校先生用の標本活用テキストも作成した。標本はふだんは森のかかく活動センターに展示されている。

この日は、学校で利用してもらうために、学校の先生と滝川公園周辺の自然を観察しながら、自然を知ってもらい封入標本を利用してもらうきっかけになればと行なった。

来られた先生方は9名で、みな自分より若くみえる先生ばかり。中学校の先生が多かった。学校ではまとまった時間を取って野外に出ることはなかなか難しいとのことで、簡単には授業での利用とはいかなさそう。生徒に封入標本を作らせたいと、むしろ標本づくりの関心が高かった。（の）

●ひがし大雪ガイド養成講座〔13日〕

ひがし大雪恒例行事に今回も講師役で参加する。前年のニペソツ山に続く、登山観察会。参加者は約40名で、あっという間に50メートル以上の列になってしまう。ハンドフォンを使ってときどき解説を入れるが、後方まで不満なく伝えるのは難しい。山の観察会は人気があるが、さすがに多すぎだったかも。しかも天気が悪く、頂上まで行くもガスと横殴りの

雨で寒かった。エゾツツジの花は久々で
美しかったが、早々に退散する。(に)



●大雪・日高調査検討委員会〔28～30日〕

大雪・日高地域の保護林拡充等を検討する現地委員会に事務局として参加。対象範囲が広いので、3日間でかなりの距離を移動して回った。ほとんどが車の中だったような。現地の案内する場所も、直前までかかってドタバタと決めたのだが、まずまず良好な森林のある場所に行くことができた。委員の方々にもざっくばらんにいろいろと意見を出してもらえたと思うが、このあと広範囲を対象とした現地調査、文献調査、GIS上に構築したデータとのにらめっこで、忙しい一年を過ごすことになった。

現場でショックだったのは、エゾライチョウをシンボルとして冊子もまとめている藤巻先生が乗っているのに、エゾライチョウをひいてしまったこと。「内臓皆出ていて、これは標本にはならないね」と先生は平然としていたが…。(お)

アックでたじたじ。今回コリヤナギを初めて見た。(に)



●知床岬植生調査〔24～28日〕

2007年に引き続き、知床での調査の機会に恵まれた。調査館のメンバーは、知床での調査は大学一年のときからやっていて、長い付き合いのある場所であるが、岬に上陸するのは初めて。エゾシカの増加で植生の変化が著しいと言われる地区であるが、以前を見たことがなくても、ハンゴンソウなどの忌避植物が栄える状態は、確かに洞爺湖中島などをほうふつさせる。エゾオグルマやナミキソウがやけにあって、これらも忌避植物と知らされた。

往復は漁船だが、すれ違うクルーズ船が多いのに驚いた。知床の観光のメインとしてすっかり定着しているようで、いろいろな船が通っていた。現地では番屋の漁師さんたちや知床財団の方たちにお世話になりました。(お)

8月

●小樽野の花愛護会の観察会〔9日〕

小樽で活動している市民グループの観察会に参加する。ふだんから小樽市内のフロウ調査をしたり、標本を作成して博物館に寄贈したりしているという。シダやイネ科など、同定が難しい植物をいっしょに見てほしいという依頼を受ける。この日は、市街地を流れる勝納川沿いを歩いて外来種を見たほか、シダやイネ科の種類が多い郊外の何地点かを見て歩いた。植物に詳しい方が多く、質問もマニ



9月

●達古武・秋の体験会〔6日〕

2008年度も達古武で2回の体験会を企画。市民の方々を募集して、森づくりや

生き物調査など、再生の取り組みの一端を体験してもらっている。今回は、実践系に力点を置いて、ササ刈りとシードトラップづくりをメニューとした。ササ刈りは、今回試験で効果が確認されたため、範囲を広げて機械を用いて実施したのだが、そのそばで人手でやったらどうかというのを体験してもらった。一人ずつのエリアを決めて、長バサミやカマでひたすら作業。大変だが、体を動かすメニューは皆楽しそう。手で刈ると手間はかかるが、残したい広葉樹の稚樹を一つずつよけて刈れるので、機械と使い分けると、話をまとめる。

シードトラップの方は、次回のための準備で、苗作りに使うタネを集めるためのセッティング。事前になり具合を見て回ったが、今年はミスナラをはじめ豊作の予感…成果を期待しての準備となった。

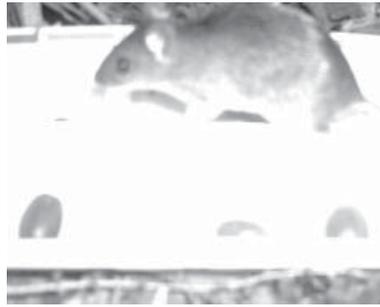
(お)



●手稲さと川探検隊調査会・秋調査編〔13～14日〕

手稲さと川探検隊の水生昆虫調査の秋編。今回は、13日に水生昆虫調査、13日の夕方から、森でネズミのワナをしかけて、14日にはワナの確認とネズミ観察を行なった。参加者・スタッフ総勢30人ほどで、1回目には比ると多くの親子が参加した。1回目と同様に斎藤さんに来ていただき、4河川の調査を行なった。やはり春に比べると全体的に水生昆虫は少なく、魚やエビばかりが捕まる場所もあったが、それはそれで子どもたちも夢中になって捕まえていた。

夕方からは、ネズミの生け捕りワナをしかける。今回は、前日から参加しても



らえるので、自分たちでワナを組み立ててもらい、かかりそうな場所を伝えて、好きな場所にしかけてもらった。ワナの他に自動撮影装置やエサの持ち取りなどを実験。ドングリがどこに運ばれるかを調べるのにドングリにネジを埋め込みそれにピンクテープを結んで目印にして置いておいた。

翌日、各自が仕掛けたワナの確認してもらくと、3名のワナにネズミがかかっていた。しかもアカネズミとヒメネズミの両方がつかまり、飼育ゲージに入れて皆で観察。アカネズミとヒメネズミの大きさや毛色の違いなどが見比べられわかりやすかった。また、ドングリを追跡したところ最長12mも運ばれていて、かなりの距離を運んでいることを実感してもらえたと思う。自分で前日にワナを仕掛けられると、どうなっているかその日の夜にいろいろ想像できる楽しみがあるので、やはりネズミの観察は2日間かけてするのが醍醐味と感じる。(の)

10月

●芦別市岨山フォーラム〔10月5日〕

夕張山系のキリギシ山で入山規制が始まって早10年になる。これを記念した自然保護フォーラムが芦別市で開催された。最初に佐藤謙さんが基調講演を行ない、入山規制以降、一部に植生回復が見られる反面、盗掘後なかなか個体数が回復しない希少植物の現状について報告があった。また、道立自然公園から国立公園への格上げや、世界遺産候補にという提案も出された。続いて、協議会の構成員に



よる活動報告が行なわれた。まず地元山岳会の山岡桂司さんが、これまで取り組んできたモニター登山、巡視活動、外来種除去について紹介し、キリギシ山の自然保護について熱弁した。北海道森林管理局からは、われわれも関わってきた現地調査の結果概要が報告された。また道からは、希少野生動植物の保護への取り組みについて、関連する制度や法律の説明があった。

会場からの質問としては、今後のモニター登山の進め方、希少種の情報公開のあり方、エゾシカの影響などについて問うものがあつた。また、入山規制は将来的にこうなれば解除になるという方針はあるのか、という質問も出された。これに対しては、「(現在のところは)ありません。モニター登山でもマナー向上が十分ではないと感じる」(山岡さん)、「収容力が小さいので非常に難しいが、(協議会構成員らで十分議論を尽くして)最後は『みんな』で決めるしかないだろう」(佐藤さん)と回答された。入山規制は傷んだ希少群落の回復には有効な手段であるが、暫定的な措置として始められた経緯もあるので、そろそろ長期ビジョンが検討されることになるのではないかと。(に)

●アポイ気象観測機器の撤収〔10月15～16日〕

2004年からアポイ岳の高山帯で行なってきた気象観測が、今年度でひと段落ついたので、観測機器を山から下ろすことになった。設置時と同様、ファンクラブの精鋭のみなさんに協力してもらおう。外された機器はこんなに重かったかなというくらい重かったが、谷村会長が男気を

見せて一番重い部分を運んでくれた。そのおかげもあって何とか陽のあるうちに下山できた。そういえば山に見慣れない鳥がいて、「エゾライチョウだろう」などと言われていたが、後で調べたら野生のウズラだった。

前夜には急きょ頼まれてマルハナバチの勉強会を開く。アポイ岳ファンクラブが中心となってセイヨウオオマルハナバチの駆除活動を行なっているとのことである。引き続き行なわれたファンクラブの納会(宴会)では、おなかいっぱい鍋



料理をご馳走になった。(に)

●達古武・秋の体験会〔18日〕

今年2回目の達古武の調査体験会。プログラムの内容はシードトラップの回収・カウント、タネと苗集め、苗づくり。参加者は16人で、天候もよく森の散策日和だった。今年は達古武で3年間不作が続いていたミズナラがようやく豊作となり、この時期でも道の上にドングリがけっこう落ちていた。この他、シナノキやタケカンバが豊作の一方、隔年で豊凶繰り返していたイヤタカエデは3年続けての不作だった。落葉で地面に落ちたタネは見つけにくいのだが、子どもの目はよく、大人の気づかないものも探しあて、大人を感心させていた。拾ったドングリはポツ



トに植えて各自家に持ち帰ってもらい、来年に育てた苗を持ってきてもらう予定。
(の)

●帯広百年記念館・標本づくり〔26日〕

帯広百年記念館の観察会に丹羽・修の2名が参加する。記念館からは池田さんと内田さんが来ていてスタッフ陣は充実していたが、天気にも恵まれず参加者は少なかった。場所は帯広の森で、ちょうどハロウィン祭りをやっていた。観察会は、昨年度から始まった、記念館のリウカ（アイヌ民族文化情報センター）の展示作りに関連したものである。アイヌの人々がむかし食べていたというヤブマメと、魔よけに使ったというイケマのイモ掘りを体験する。ヤブマメのイモ（閉鎖花由来の実）は地表近くにあって道具を使わずに簡単に採れる。イケマの方は大きくて、深いところにあるのでスコップで掘り取って形状を観察した。また、ほぼ活動を終えたコガタスズメバチの巣が2個あったので、それも採集する。(に)



て硫黄山に向かう散策路が整備されている。散策路沿いには20基ほどの解説板やコース案内板があるが、老朽化したことから来年度以降に改修が予定されている。改修では展示内容を含めて一新することが計画されており、その設計を調査館で受託することになった。川湯には10年前に一度訪れたことはあるが、何分にも古い話なので、この機会にいちど現地を見ておこうということで出かける。エコミュージアムセンターの藤江晋さんに案内をお願いし、一緒に一つ一つの解説板を点検していく。野外での展示は会社として初めての経験なので、今後に向けてもよい経験になるようにしたい。(に)



●手稲さと川探検隊調査会・ソーティング編〔29日〕

春と秋に採集した水生昆虫を種類ごとに仕分けするソーティングの作業。2回の調査で採集した季節・場所・調査方法の異なる14本の採集ボトルの中身を仕分けする。代表の鈴木さんの多方面への呼びかけで、30人近い大勢の人が参加。専修大の学生さんや道工大の学生さんなど水生昆虫に詳しい人も多くいたことと、みな熱心に作業したため、順調に進んだ。6班に分かれて、各班に詳しい班長さんに入ってもらい作業を進める。季節・場所・調査方法が異なる2本のボトルのソー

11月

●川湯標識再整備調査〔18～19日〕

道東の川湯温泉には、つつじが原を經



ティングが各班のノルマ。小さくスリカばかりの班、魚やエビカニばかりの班、カゲロウやトビケラばかりの班と、班に

よって当たったボトルの中身は様々だったが、みな不平も言わず作業してくれた。地味な作業なので、飽きないか懸念されたが、みな結構最後まで楽しんくれたよう。市民調査でソーティングだけの作業というのは初めての経験だったが、プログラムとしても十分に有効なのだと感じた。

作業のほうは無事に終わり、残るは同定作業。同定は斎藤さんにお願ひし、1月ごろには結果が判明する予定。(の)

講演会傍聴記 2008

丹羽真一

他の団体などが主催した講演会・シンポジウムの内容をまとめて紹介。

●北広島森の倶楽部講演会・講演 [2月17日]

矢部和夫氏(札幌市立大)による講演(『北海道の湿原景観』)を聴きに、北広島に出かける(北広島森の倶楽部、主催)。日本では一括りにされがちな湿原だが、欧米ではフェン fen とボグ bog に大別されること、湿原の解説によく用いられる「高層-中間-低層湿原」の区分が現在では学問的に使われていないことなどを講演によって知る。フェンとボグの違いは主に、前者がヨシとスゲ類を優占種とし、後者がミスゴケを優占種とするところにある。講演の全体を通して、湿原の理解にはミスゴケがキーになることがよく理解できた。単なる湿原植生の違いにとどまらず、演者の30年に及ぶ研究によって解明された湿原の形成・維持メカニズムの話題は、とても興味深かった。

●北方山草会・講演会 [3月22日]

大原雅氏(北大)の講演と梅沢俊氏のスライド上映会が行なわれた。大原さんは、ご自身の代名詞でもあるエンレイソウをあえて封印し、同じ林床植

物のスズラン・オオウバユリ・ハイケイソウの研究を紹介された。いずれの植物も、種子繁殖(他殖)と栄養繁殖をたくみに使い分けている。中でも、スズランには地下茎が最長30メートル近くも伸びているものがあるという話には驚いた。また、ハイケイソウは開花間隔もクローン成長の仕方にも、多くのなぞがあるようである。国際的な学会誌に載るようなお話ばかりで非常に中身の濃かったが、努めてゆっくりしゃべっていただいたおかげでたいへん理解しやすかった。

梅沢さんも、今回はいつもの花ではなく、花の咲かないシダについてお話しされた(会報でシダを小特集していることに合わせたもの)。ヒカゲノカズラ科からオシダ・メシダ類にいたるまで、分類群ごとに実に豊富なスライド写真が登場した。私にとっては珍しいシダにも、「割りとよく見ます」「そんなに珍しくない」が連発されていて、自分の経験の足りなさも痛感した。

北海道植物友の会、北海道野の花を考える会からも参加者が大勢いて、よい交流の場にもなったようである。

●北海道植物友の会・講演会 [4月5日]

北海道野生植物研究所の五十嵐博さんの講演を聴く(「北海道のシダ植物の分布」)。現在、各地でさまざまな生物マップ調査が行なわれているが、五十嵐さんは全道(離島を含む)を対象に、2000種類以上の野生植物の分布を調べている。しかも大半は一人で調べているというからすごい。「全種について調べたいが、死ぬまでやっても無理」と笑って話されるが、間違いなく後世に残る「大事業」だろう。

講演では代表的なシダ植物の分布地図を見せながら、形態や分布の特徴などについて一つ一つ丁寧に解説されていた。全道に分布するものもあれば、特定の地域に限られるものもあり、興味は尽きない。このようなマクロスケールの分布のなぞを解くには、生態の解明ももちろんだが、ミクロスケールでの分布や中間スケールでの分布の特徴(地形や地質などとの対応関係)を解明することも重要だろう。

●シンポめぐり [6月28日]

この日は自然関係のシンポが札幌市内でいろいろあった。せっかく街に出るので、はしごする。午前は「救おう! 森のいのち 考えよう! 森の未来」(日本森林生態系保護ネットワーク主催)に行く。外国からの研究者の発表も含まれていて、河野昭一さんの同時通訳。学術的な内容でとても中身が濃かった。お昼は国立環境研のシンポ(「温暖化に立ち向かう」)に行き、学生時代の同級生だった西川潮くんらのポス



ター発表を視聴する。その後、昼食を抜いて北大総合博物館に行き、シンポジウム「分類学の帰還」に参加。『生き物に名前を付ける』という柔らかな演題に期待をもって出かけたが、分類学を納めていない人間には歯が立たない内容だった。一日中視聴してとても疲れたが、勉強した気分には浸れた(ただの消化不良か!?)。

●北海道植物友の会講演会 [12月6日]

会の中心的メンバーの一人で、シダに詳しい国兼治徳さんが「シダ植物についての一考察」というテーマで話題提供を行なう。これまでは会の内外から演者を選び、講演してもらうことが多かったが、今回は見分け方の勉強会というスタイルで、この会では意外と斬新だったように思う。道内にも、あまり知られていないシダの交雑個体がいるとあるようで、案外そんなこともシダの同定を難しくしているのかもしれないと感じた。シダに続いて、イネ科やスゲ類などの勉強会もあればありがたいと思う。

■最後にオマケ

調査館メンバーに新しいファミリーが。渡辺展之のところに7/25に双子が生まれました。左が倫奈ちゃん♀、右が友くん♂!





達古武・冬の沢調査(2月)



和琴半島・展示製作(2月)



屈斜路・オオハクチョウ(3月)



帯広・標本展示会(3月)



洞爺湖・西山山麓火口(4月)



野幌・ガイド養成講座(5月)



夕張・マルハナ捕獲調査(5月)



夕張・アカマルハナバチ(5月)



札幌・造園学会発表(5月)



手稲・水生昆虫調査会(6月)



手稲・モズガニ捕獲(6月)



アポイクワガタ(6月)



札幌・環境総合展(6月)



札幌・環境総合展標本(6月)



樽前山・イワブクロ(6月)



樽前山・イワヒゲ(6月)



洞爺湖・サミットカウント(6月)



洞爺・ジャガイモ畑(6月)



夕張・前岳(7月)



夕張・希少種個体群調査(7月)



達古武・委員会視察(7月)



滝川・児童向け標本(7月)



東大雪・西クマネシリ(7月)



東大雪・エゾツツジ(7月)



大雪・調査検討委員会(7月)



沙流岳・チシマヒョウタンボク(7月)



小樽・穴滝(8月)



小樽・ヒロハヒルガオ(8月)



知床岬・海岸植生(8月)



知床岬・文吉湾(8月)



知床岬・エゾオグルマ(8月)



達古武・地表処理実施(9月)



達古武・ササ刈り体験(9月)



アポイ岳・観測機器撤収(10月)



達古武・苗づくり体験(10月)



帯広・標本使って観察会(10月)



帯広・ヤブマメの地下豆(10月)



川湯・ハイマツ鈴なり(11月)



川湯・硫黄山とつつじが原(11月)



手稲・水生昆虫整理(11月)